

カフカの「城」に関する試論(14) : ブルンスヴィックとその家族をめぐる覚書

著者	芳野 昇
雑誌名	日本歯科大学紀要. 一般教育系
巻	24
ページ	1-13
発行年	1995-03-20
URL	http://doi.org/10.14983/00000429



カフカの「城」に関する試論

XIV. ブルンスヴィックとその家族をめぐる覚書

Versuch über Franz Kafkas Schloß

XIV. Notiz um Brunswick und seine Familie

新潟歯学部 芳 野 昇

Noboru YOSHINO: The Nippon Dental University, Hamaura-cho 1-8,
Niigata 951, JAPAN

(1994年11月28日 受理)

1

筆者はこれまで Franz Kafka の未完の長編小説『城』の作品分析を重ねてきて、とりわけ主人公 K をめぐる登場人物の形姿を中心にシリーズで覚書してきた。そしてその大方の作業を果たした今、残された個別の課題は村人 Brunswick とその家族、つまり主人 Brunswick と城の出身の妻と息子 Hans、そして娘 Frieda からなる一家をめぐる覚書と、使者 Barnabas とその家族、つまり息子 Barnabas と Olga と Amalia の姉妹、そして彼等の両親からなる呪われた Barnabas 一家をめぐる覚書、更に村の女教師 Gisa と青年 Schwarzer めぐる覚書、最後には村長と小学校教師をめぐる覚書に集約される。

本稿はその Brunswick の家族に焦点を合せて、構成人物を原典に即して分析し、覚書する。

2.

2.1. 息子 Hans Brunswick が紹介するマドレーヌ通りで靴屋を営む父親 Otto Bruns-

wick は第1章にすでに登場している。主人公Kが村に到着した翌日、深い雪の村道を彷徨った挙句、偶然身を寄せた農家で丁度湯気をたてて風呂に浸かっている二人の男の一人が、他ならぬ村人 Brunswick である。思慮深い男で^{なめし}鞆革屋の Lasemann と対称的に>品性の卑しげで大声で喚き立てる^{なめし}頬髯の男 (der schreierische Vollbärtige der Geringere) <¹⁾と描写されている。そして丁度その農家に居合せた謎めいた神秘的な女性で、>城の娘 (Ein Mädchen aus dem Schloß) <の夫 Brunswick である。ただ二人の男の一方が Brunswick 本人であることをKは後で分って、「一週間前にラーゼマンとブルンスヴィックに力尽くで農家から押し出された」²⁾と語っている。何よりもこの Brunswick が以前より村の測量技師招聘問題に絡んでいて、「政治的な理由からであろうとも、測量技師の招聘を要求した人々の首謀者 (der Führer der Jenigen)」³⁾であった。

2.2. 第5章でKは村長 (Vorsteher) との対話から初めてこの Brunswick の正体を聞き知る。「そのように自明なことに——つまり測量技師は全く必要ないということが——ともかく少なくとも疑わしい事にされたのでした。特にその時にブルンスヴィックとかいう男が (ein gewisser Brunswick) 際立ったのです。恐らく貴方は彼を御存知ないでしょうが、彼は悪い (schlecht) 男ではないかも知れないが、愚かで突飛な空想的で (dumm und phantastisch)、ラーゼマンと義兄弟なのです。」⁴⁾

この村は全く>測量技師など必要ない (kein Landvermesser nötig sei) <⁵⁾と主張する村長とは反対派 (der Opposition) の Brunswick は旗頭なのである。この測量技師招聘問題をめぐる両者の対立は数年来続いていたが、どうやらKの到着の直前までは一応の全体の無事なる決着 (nach glücklicher Beendigung der ganzen Angelegenheit) が付いていた。ところがこの村の事情に無知のまま偶然に、かつ突如としてKが出現して、咄嗟に測量技師を名乗るという冒頭の展開は実は表向きであり、むしろこの村の実情をすでに聞き知っていて、敢えて測量技師の職を目論み意図してこの村にKはやって来ていたということになりかねない。

多数派 (der Majorität) の村長と反対派の Brunswick との対立は事実調査にあたる役人 Sordini の良心 (die Gewissenhaftigkeit) で決着というより、暗礁にのりあげている時期にKの登場で一気に両派の勢力争いが緊迫化することになる。村長によれば Brunswick という人物は一村人の出身で身分が低いが、身分の高い城の出身の娘を妻にし、何かと企む危険人物なのである。

「しかも当時ブルンスヴィックは幾分かの影響力を得ていました。彼は雄弁家 (ein Redner) ではないが、煽動家 (ein Schreier) で、それだけでもかなりの村人達には十分であり、……当局とのいろんな個人的結び付きを持っているブルンスヴィックは愚直さと

野心とによって、持前の空想力による絶えず新しい工夫（むしろ捏ち上げ）をこらして城当局を動かしてきたのです。』⁶⁾更に村長によれば Brunswick は何か新しい事 (etwas Neues) を考え出して、陰謀を企み、村長自身はこの謀略家 Brunswick と愚直な役人の二人に悩まされつづけたという。何よりも K を測量技師として採用する問題は目下のところ村を二分する、当面の重大な問題となり、この問題の決着のもう一方の鍵を他ならぬ Brunswick が握っていることとなり、当然、K からの Brunswick へのアプローチが計られ、物語は展開されることになりうる。「息子の Hans と話しているうちに、確かにブルンスヴィックは普段は危険で悪い人間 (ein gefährlicher und böser Mensch) であるかも知れないが、本来は彼 (K) の敵対者 (sein Gegner) ではありえないことを K は思い付いたのだった。』⁷⁾ただ作品の叙述が連綿として一面詳細を極め、また作品が肥大化していき、6泊7日のKの村の滞在では Brunswick との直接に対話する場面は構成されずに、作品は中断されてしまったのである。

2.3. 村八分になっている Barnabas 一家と靴屋 Otto Brunswick との関係について検討してみる。何よりも >アマーリアの秘密 (Amalias Geheimnis)< をめぐって姉娘 Olga が K に次のように Brunswick の素性を語っている。

「当時（3年前まで）我家の助手 (Gehilfe) であったブルンスヴィックはいつものようにやって来て、父は彼に仕事を割り当ててやり、帰宅させた。』⁸⁾

どうやら3年前の村の消防祭で Sortini との事件を仕組んだのは、他にならぬ Barnabas 一家の父親の手代である Otto Brunswick の陰謀ではなかったのか。祭の当日 Brunswick は沈黙気味の Amalia を指してこう言ったという。「„あの娘 (アマーリア) は本当にソルティーニにぞっこん惚れてしまったぞ (toll und voll in Sortini)“ といつもどこかがさつ (grob) で、アマーリアのような性質には全く無理解な人ではあるが、この時こそ私達は彼 (ブルンスヴィック) の発言がほとんど正しかったように思えたのでした。』⁹⁾そして見逃してはならないのは Barnabas の父親によれば >あの決定的な朝 (jener entscheidende Morgen)< となる直前に、「ブルンスヴィックが使者 (ソルティーニの使者) と引き裂れた手紙について何か語っていた」¹⁰⁾ という事実である。Brunswick が絡んだ謀略によってか、Barnabas 一家の運命的な不幸は祭の翌朝決定づけられてしまい、Olga によれば Barnabas 一家の罰が下され始まるやいなや、驚いたことに手代の Brunswick が変り目早く、透かさず一家の下にやって来て、「独立したいと父に向って気真面目に言い、ブルンスヴィックは悪賢い頭脳の持者で、機を利用することを心得た人なのです。』¹¹⁾

更に Olga の話によれば Sortini との事件を契機に「私達はもちろん私達の家を離れな

ければならなくなり、ブルンスヴィックがその家に移り住むこととなり、この堀っ建て小屋 (diese Hütte) が私に割り当てられたのです。』¹²⁾元の親方の家族が小屋に住み、手代が今や大きな部屋 (große Stube) のある家に居住するという主従関係の逆転現象がこの村の現状でもあり、正に下剋上の様相を呈した変革期の村であるともいえようか。そして村八分のために誰れからも支援もなく、財産をほとんど使い果たしたこの Barnabas 一家の息子が当座は逆に「ブルンスヴィックへの再三の懇願の果てに見習職人 (Gehilfe) として採用されるはめとなった。もちろん夕方暗くなって注文をもらいに行き、再び暗がりの中で仕事を届けるというやり方に限られていて、ブルンスヴィックはの場合私達のために商売上のある種の危険を引き受けたことは認められるが、その代りにバルナバスには実に大変少ない賃金しか払われず、そしてバルナバスの仕事はなんの落ち度もない (fehlerlos) ものだったが、その賃金は私達を完全に飢えから身を守るために辛じて足りるだけしか貰っていなかったのです。』¹³⁾

2.4. 村長の言草を信ずるならば、愚かで気紛れな下司の村の男 Brunswick は>城の娘くんと結婚し、Sortini 事件を仕組んで親方から靴職人の利権を奪い、次には懸案の村の測量技師招聘問題を煽動し、多数派の村長と対抗して、いずれは次期村長の座をめざしてか、この閉塞した寒村にあって実に政治的行動力に豊んだ人物として叙述されている。それは敢然とした行動力と意志力とを担った人物、他ならぬ主人公Kの形姿と類似した側面を持つ人物像を Brunswick から抽出できよう。いわゆる成り上がり者の Brunswick は Hartmut Binder によれば、作者 Kafka の友人で野心的なジャーナリストとして活躍した Willy Haas の人物像と重ねて考えられるという。¹⁴⁾

2.5. この気難いお天気屋で、浅薄な自信家で、それだけに人間味ある人物とも考えられる Brunswick とKとの直接対話する場面は前述したように、作品が未完のうちに中断されたためか存在しないが、Kと息子 Hans との対話の中に更に次のように叙述されている。「だからKの村への到着はブルンスヴィックにとっては歓迎すべき (willkommen) ことであったにちがいがなかった。その場合も確かに最初に (二人が) 会った日での腹立たしく (不愉快な) 応対 (die ärgerliche Begrüßung) や例のハンスが語った (Kに対する) 反感 (die Abneigung) はほとんど理解しがたいものだった。ひょっとするとしかしブルンスヴィックの方ではKがまず最初に彼 (ブルンスヴィック) に援助を求めなかったので、どうやら気分を害した (gekränkt) のかもしれなかった。ひょっとしてまた別の誤解 (ein anderes Mißverständnis) があったのかもしれなかった。そんな誤解は二、三言で解かれるはずであった。しかしそのこと (誤解が解れること) が生じたら、その時はKはブルンスヴィックから (村の) 教師、いやそれどころか村長に対しても歴とした後

楯 (einen Rückhalt) を得ることができる、この全くの役所の欺瞞 (der ganze amtliche Trug) —— 一体にそれは欺瞞以外の他のなんであろうか ——、その欺瞞で村長と教師が彼 (K) を城当局から (von der Schloßbehörden) 遠ざけて学校の小使の職に押し込めた、(その欺瞞は) 暴露されて、改めてブルンスヴィックと村長との間に K をめぐる闘い (um K geführten Kampf) が起って、ブルンスヴィックは K を自分の味方に引き入れるにちががなく、K はブルンスヴィックの家の客分になるにちががなく、ブルンスヴィックの権力手段は (Machtmittel) 村長に対抗して、彼 (K) のために意のままに使われるだろう。』¹⁵⁾

相変わらず自己中心的で、また楽天的な行動の論理で K はやがて Frieda との訣別を予感しながら、新たに Brunswick の存在を重視し始め、様々に勝手な夢想 (Träumen) を展開する。そして Otto Brunswick の息子 Hans を通して、まずは Hans の母で、城の娘である Brunswick の妻への接近を心に決めるのである。結局息子 Hans は「彼 (K) が測量技師の採用のため (wegen der Landvermessersanstellung) ブルンスヴィックと話したい」¹⁶⁾ という K の申し出をしゅしゅぶながら了解し、その機会をつくることを K に約束するのであった。

2.6. Marthe Robert は「ラーゼマン、ブルンスヴィック、ゲルステッカーはドイツのいかなる地方でも見過ごされる人名だ」¹⁷⁾ としているが、Elizabeth M. Rajec によれば Brunswick の >wick< は語源的には村 (Dorf) や場所 (Ort) や住居地 (Wohnstätte) を意味し Otto は所有 (Besitz) を意味していて、あくまでも村での生存 (die Existenz im Dorf) をかける主人公 K とに関連させた名前と見なしている。¹⁸⁾

2.7. 改めて Brunswick 一家の家族構成をまとめると、今や村一番の靴屋となった父 Otto Brunswick と >城の娘< である母と、村の宿屋 >橋亭< の亭主と同名の息子である少年 Hans と長官 Klamm の恋人と同名である娘で乳飲み子 Frieda の四人である。

少年 Hans と K との最初の出会いの場面は Hans 自身が後述しているように、第 1 章の Lasemann の家で遊んでいる子供達の場면을指摘できる。そして 2 回目の出会いは第 12 章となる。小学校の小使に追いやられた K と Frieda と二人の助手は小心で権柄尽くの教師とヒステリーでサディステックな女教師 Gisa の怒りから逃れて、子供達の喚き声や笑い声の中で猫の爪でひっかかれて K は手の甲から血を流していると、「一人の凡そ 12 歳ばかりの少年が長椅子から歩み寄ってきて K の手に触り、大変な騒ぎの中で全く理解しえない何かを言うのだった。」¹⁹⁾ しかしこの時も K はこの少年 Hans には無関心で、ただひたすら K と Frieda の間に付きまとっている無能で無器用な二人の助手の扱いをめぐって、辟易しながら Frieda と語り合っているにすぎない。

次の第13章は副題に Hans の名が付けられた Hans と K の対話の章で, Klamm からの新たな手紙を期待して使者 Barnabas を待ち侘びる K のところに, Barnabas ではなくて, この小さな少年 (der kleine Junge) Hans が冒頭から登場して, K に何かお手伝いできるかと申し出る。K が名前を問うと, 「ハンス・ブルンスヴィックで, 第4学年の生徒でマドレーネ通りの靴屋オットー・ブルンスヴィックの息子です。」²⁰⁾と自己紹介する。

>何よりも男の子らしい想像力 (vor allem solche knabenhafte Vorstellungen) <を持ち合せ, >真剣 (ernst) <である一方, >ほとんど精力的で賢明な先見の明のある一人の男性 (fast ein energischer kluger weitblickender Mann) <とまず Hans は叙述されている。²¹⁾つまり>子供らしい無邪気さ (mit kindlicher Unschuld) <と>まるで意識に内向的でほとんど陰険で腹悪い (wie unbewußt verschlossen fast hinterhältig) <少年である。²²⁾こうした正に>自己欺瞞に落ちてしまいそうな (selbst getäuscht) <矛盾した両極の人物表現法は作者 Kafka 一流の手法ではある。あくまでも母親を庇う Hans は無骨者で身分の低い父親, K を嫌らい K に憤慨している Otto Brunsuick に>対抗するために K の援助 (bei K Hilfe gegen den Vater) <²³⁾を意図的に求めているのである。一方また前途が行きづまり袋小路にはまり込んでしまった>異邦人 (Fremde) <K にとって Hans の出現は渡りに舟以外の何物でもない。そして Hans に即座に対応する K の常套手段に Frieda は「ここで悪用されたあの善良な少年と, あの時酒場にいた私 (フリーダ) との間にどんな大きな違いがあったでしょう」²⁴⁾, と皮肉を込めた非難の言葉を K に浴びせている。Hans はもちろん大人のような理解力で>K の現在の立場 (Die gegenwärtige Lage K's) を決して羨むべきものでなく, むしろ哀れで軽蔑に値するもの (keineswegs beneidenswert, sondern traurig und verächtlich) <²⁵⁾と見抜いていたが, 何よりも母親自身が時に K のことを言及した事が Hans を動かしたという。

「こうした矛盾 (Widerspruch) から彼 (ハンス) の中に次のような信念 (Glaube) が生じた。なるほど今は K はまだ身分が低く (niedrig), 威嚇的な (abschreckend) ところがあるが, しかしもちろんほとんど想像しえない程の遠い将来には (in einer allerdings fast unvorstellbar fernen Zukunft) 彼 (K) はけれどもすべての人々 (村人達) を凌駕する (übertreffen) だろうと。そして正しく実に無意味な程の遠い将来 (Ferne) とそこへ行き着くはずの誇りうるに足る展開 (die stolze Entwicklung) がハンスの気持を動かしたのだ。つまりこの値打ちで彼 (ハンス) はむしろ現在の K を甘受し, 我慢しようとしたのだ。この願望が特に子供らしく, かつ大人びてませてる (kindlich altkluge) ことは, ハンスが K に対してまるで年下の者に対するように見下し, その (K の) 将来は彼 (ハンス) 自身の, いわゆる幼ない少年の将来よりはるかに発展するという

ことにあったのだ。』²⁶⁾

Frieda の質問に対して Hans は将来の希望は、なんと >K のような男性になること (ein Mann werden wie K) <²⁷⁾だと、あくまでも K に好意的 (gutgesinnt) である。

2.8. 無心で感受性の豊かな少年 Hans, 強情なほどの自尊心と自意識の持主である Hans 少年は、横暴で無神経な父親 Otto Brunswick を恐れ、>城の娘<である自慢の母親にひたすら従順で敬慕している Hans の形姿には、作者 Kafka の幼年期への追憶が一面込められているようにも思われてならない。Kafka の母 Julie Kafka はかなり裕福なドイツ・ユダヤ系の家系の出身で、父 Herrmann Kafka は西ユダヤ人の末裔でチェコの寒村の身分の低い家の出であり、この資産家の娘と貧しくも野心に満ちた男との結婚、そして Kafka の母の少くない持参金は父がまず小物商を営むのに大いに役立ち、やがて卸商人として成功させる基盤となったとなると、正しく Otto Brunswick の成功に匹敵する。

2.9. K はすでに第 1 章で戸外の寒さに耐えかねて偶然入り込んだ皮屋の Lasemann の家で、丁度風呂に入りに来ていた Brunswick 一家の親子 4 人に会っていた。とりわけ Otto Brunswick の妻で Hans の母である >城の娘<の描写は作品『城』の全体の中でも最も印象的な場面の 1 つである。

城山への道を早速求めつづけて深い雪野原を歩き回り、疲れ切って K が立ち寄った小さな農夫の家、そこで二人の男が浸かる風呂の湯煙 (Rauch) と青白い雪明 (bleiches Schneelicht) の下、絹地のような光沢 (Schein wie von Seide) が衣服に映えて部屋の奥の背の高い安楽椅子に疲れて (müde) 横える女性、胸の乳呑児 (einen Säugling) を抱いていて、彼女の回りに戯れる子供達、まるで一幅の聖母像を見る思いがする。²⁸⁾この女性が他ならぬ Otto Brunswick の妻であり、湯浴みしている男の一人は夫の Otto Brunswick、乳呑児は息子 Hans の妹 Frieda であり、回りで遊んでいる子供の一人が Hans 少年であった。²⁹⁾

この安楽椅子に横たわる女性 (die Frau im Lehnstuhl) は「まるで生きていない (leblos) のように横たわり、胸元の子供には眼もくれず、定かならない高み (in die Höhe) を見やっていた。」³⁰⁾一方、長い間の雪原での歩行ですっかり疲れ果てた K はこの女性の相変らずの美しく悲しげな姿 (dieses sich nicht verändernde schöne traurige Bild) にしばらく見とれて、やがてふと眠り込んでしまうのであった。そして覚めた K は少し元気を取り戻し (ein wenig erfrischt von Schlaf)、意識的にこの安楽椅子の女性に近寄り、次には出拔けに (unerwartet) 身をひるがえして、この安楽椅子の女性の面前に K は立ち塞がるのであった。その時 K はある種の予感を抱いてこの神秘的で忘我で無関心の、あるいは

衰弱した病身の上品な女性に魅惑されてか、「貴女は誰れなのか」³¹⁾と尋ねている。すると彼女は「さも軽蔑するかのように (wegwerfend), そしてその蔑みは (Verächtlichkeit) Kに対してか,あるいは自分自身の返答に対して当てられたのか定かではなかったが,>城の娘<(Ein Mädchen aus dem Schloß) と言うのであった。」³²⁾

城の出身 (aus dem Schloß) という言葉はこの村に定住しようと企むKにとっては,当然のことながら益々価値ある事柄となっていくのである。少なくとも Frieda を通して長官 Klamm による城への道,使者 Barnabas による城への道,そして少年 Hans を通して村人 Brunswick による,むしろ城の娘である Hans の母による城への道を探ろうとするKの明確な標的に,この女性はやがて算出されるのである。そしてKのこの Brunswick の妻への接近の意図は Frieda によって早くも暴かれて,第14章は>フリーダの非難 (Friedas Vorwurf) <を構成している。

「思いやりある数々言葉を使って (durch die teilnehmenden Worte) 私にはだんだん分ってきた貴方 (K) の目標 (Dein Ziel) をスムーズに立ち向かせるために,貴方は彼 (ハンス) の容易には獲得できない信頼 (Vertrauen) を勝ち取ったのです。その目標とはあの女性 (ハンスの母) だったのです。」³³⁾つまりこの Frieda のKへの非難は自分の仕事 (Geschäft) だけを考え,そのために誰れ彼と,いかなる人も悪用しよう (mißbrauchen) とするKの闘い (Kampf) の方法,むしろ生き方を詰り,ほのかに抱き始めた K への Frieda の愛 (meine Liebe zu Dir)³⁴⁾がもはや K への不信感 (Mißtrauen) となって,両者の関係は,やがて破綻していくことへの予告に他らない。ところがKはこの Frieda の嫉妬心を帯びた洞察力と非難を是認しながらも,むしろ居直った口調で次のように明言するのである。

「なんらかの方法で希望 (irgendwie Hoffnung) を与えてくれるものはすべて利用しなくてはならないのでは。それにつけてもこの女性は城の出身だよ。僕が最初の日にラーゼマンのところへ迷い込んだ時に彼女自ら僕にそう言ったんだよ。彼女に助言 (Rat) やあるいはむしろ助力 (Hilfe) を頼むより近道が何かあったらどうか (Was lag näher)。つまり女将がグラムから (僕を) 遮ぎるあらゆる邪魔立を熟知していればこそ,この女性はおそらくその道 (城への道) を知っているはずで,彼女は正にその道を自ら下りて (この村) に来たのだから。」³⁵⁾村の測量技師招聘問題に絡んでいる靴屋の Otto Brunswick と K に憧れる息子 Hans を通して Brunswick の妻とに接近して,長官 Klamm とのコンタクトを得てついには測量技師の定職の認知と定住権を勝ち取ろうとするKの要求は,当然の成行でもあり,また切実である。しかしKの愛を得て,この閉塞した村から南の地へ脱出したいと願う Frieda にとってKの楽天的ながら打算的な行動は背信行為として生理的

にも許せないのである。結局KはFriedaとの訣別によって、FriedaからのKlammへの道が閉ざされてしまうのであった。

2.10. 第1章でKが観察したHansの母親は病身であるとも判断できて、「この母は幾分か病弱(kränklich)だが、しかしどんな病気かということは不確かなままだった。」³⁶⁾そこでHansがKとの対話の中で、「僕(ハンス)に母があそこで(ラーゼマンの家で)もしかしたらもう一度あの測量技師がいなかったか、と尋ねたのです。ところで母は非常に衰弱して(schwach)、疲れている(müde)ので、無用にしつこく聞き正すことは許されず、そこで自分(ハンス)はあそこであの測量技師と会わなかった、とだけあっさり(einfach)言っただけです。」³⁷⁾このHansの言訳を聞いたKは透かさずHansの母に接近する手段として、「自分(K)には幾分か医学的知識(medicinische Kenntnisse)があり、更に貴重なことには患者を治療した経験(Erfahrung in der Krankenbehandlung)がある。」³⁸⁾とはったりをきかせてBrunswickの家への訪問を迫るのである。するとHansの方は母をある種の思惑からか、庇ってKに返答している。「彼女(母)はKのことを話に聞くつもりはあるだけで、彼(K)と話をするつもりはないのです。ともかく彼女が患っているのは全く本来の病気ではない(keine eigentliche Krankheit)のです。彼女は自らの容態の原因を十分心得ていて、時折、それは多分彼女が耐えられないのは、この土地の空気(die Luft hier)であるが、父と子供達のためにこの土地を(den Ort)離れられないことを仄めかしたりしてます。」³⁹⁾

Kを母親に会せまいとするHansの強情なまでの言分が読み取れ、まるで母親のこととなるとすべての者は敵役にされて、母親を守るために様々な矛盾する言訳が持ち出される。母親の病気そのものの真偽は不明のまま、Kが医師を装って母親に接近しようとすると、実は病気でなく、この村の空気に順応できないという理屈を並べる。ここにも無垢な少年Hansが加えて持つ天邪鬼的性分やOedipus complexの一面を読み取れるよう。

ともかく村の下司な男に求愛されてその男の妻となるという、まるで役人Sortiniと村娘Amaliaの逆のケースであり、Amaliaのように拒絶の意志が貫らぬかれなかったにもかかわらず、村八方の一家の両親を主導権を持って世話するAmaliaの実態に類似して、村の危険分子とみなされている夫Otto Brunswickを見守るこの>城の娘<の孤高な形姿は実に印象的で、また暗示的でもある。

ついにKは息子Hansから測量技師の地位について父親Brunswickとも話す同意を得る。そしてこの場合Hansの方はKによって母親を父親から守れると考え、一方、KはBrunswick一家の客として(K würde Gast Brunswick Hause wenden)いずれにせよこの婦人(Hansの母)に近づくことができる(in der Nähe der Frau würde er jedenfalls

häufig sein) ことをすでに夢想 (mit den Träumen) するのである。⁴⁰⁾しかしKのこの計算し尽された実に打算的で意図的な Brunswick 一家への接近は、この作品『城』の更なる構成に大きく寄与し、緊迫した冒険的で飛躍的な展開を読者は十分予想でき、また期待もするが、Hans とのこの約束はついに果されないまま、つまりKの Brunswick 一家への訪問の場面が語られず、Brunswick 夫妻とKとの一面劇的な対話の場面は読者の意に反して皆無のまま作品『城』は中断されてしまったのである。

2.11. Marthe Robert はこの>城の娘<の石化して死んだような放心した態度に思わずKは忘我と睡眠へ誘い込まれ、「覚醒時に、彼 (K) はバルナバスや>城の娘<を、まさしく自分を迷わせる>鬼火<として扱っている。これこそ彼 (K) のドラマを解決不能にする原因である。」⁴¹⁾という解釈を施している。更に Marthe Robert はこの村を女性達が支配する>母権制<社会に見立てて、他ならぬ主人公Kを村の女性の性に翻弄されて、ついに村の定住を許可されずにいつまでも異邦人という宙吊りの男性として批判的解釈を下している。

Wilhelm Emrich はこの病身のごとく死んだような女性である>城の娘<は「決して聖女 (Heilige) ではなく、>生活<の活力と>精神<の権化 (Macht) から逃れようとするが、止むなくその力の中に落ちたままではいざるを得ない不幸な女性 (unglückliche Frau) なのである。」⁴²⁾と論じている。

また Hartmut Binder の伝記的研究によれば Frieda や女教師 Gisa と並んで Frau Brunswick にも Milena Jesenská の面影が反映しているという。⁴³⁾そして更に加えてこの Frau Brunswick の形姿は作者 Kafka と二度目の婚約解消した後、渡米して結婚し、かの地で子供を儲けた Felice Bauer や、Kafka と Felice との婚約時代に両者の間を取り持ち、しだいに Kafka が愛の感情を懐き始めた Grete Bloch への追慕を筆者は重ねて考えている。

3

この村人 Brunswick 一家の形姿も作品『城』自体が中断されてしまったが故に、残念ながら大方は仮説による中途半端な覚書に終始しなければならなかった。ただ全篇中 Barnabas 一家と並んで主人公Kの運命を担った暗示的要素として大きく作用する家族であることは確かである。

Anmerkungen

- 1) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 24. 尚, H. Binder は朝に Brunswick 達が風呂に浸かっている風情は Milena の父親が当時毎日冷水浴をしていた事実と関連させている。Vgl, Kafka in neuer Sicht, J. B. Metzler, 1976. S. 333
- 2) Ebd. S. 314.
- 3) Ebd. S. 235
- 4) Ebd. S. 109.
- 5) Ebd. S. 111
- 6) Ebd. S. 109.
- 7) Ebd. S. 234f
- 8) Ebd. S. 316.
- 9) Ebd. S. 301.
- 10) Ebd. S. 318.
- 11) Ebd. S. 319.
- 12) Ebd. S. 331.
- 13) Ebd. S. 338. 但し, S. 271f には三年後の現在は Barnabas は Brunswick の仕事を片手間にもしていて, もし意欲すれば, 昼も夜も仕事がもらえて, たっぷり収入が入るのだという叙述がある。
- 14) Binder, Harmut: Kafka in neuer Sicht, J. B. Metzler, 1976, S. 331.
- 15) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 234.
- 16) Ebd. S. 36
- 17) Robert, Marthe: 古きものと新しきもの, 城山良彦他訳, 法政大学出版局, 1973, p. 213.
- 18) Rajec, Elizabeth M: Namen und ihre Bedeutungen im Werke Franz Kafkas, Peter Lang, 1977, S. 168.
- 19) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 206
- 20) Ebd. S. 223.
- 21) Ebd. S. 224f
- 22) Ebd. S. 233.
- 23) Ebd. S. 235.
- 24) Ebd. S. 249.
- 25) Ebd. S. 237

- 26) a. a. O.
- 27) Ebd. S. 236.
- 28) Vgl. Robert, Marthe: 古きものと新しきもの, 城山良彦他訳, 法政大学出版局, 1973, p. 241,
- 29) Vgl. Kafka, Franz: Tagebücher, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1990, S. 881.
即ち, 作者 Kafka は作品『城』の執筆開始を考えられる 1922 年 1 月 27 日の保養地 Spindelmühle の滞在直前の 1 月 19 日の日記に次のように書いている。「母親に向い
あつて自分の子供の揺籠の脇に座するという無限で暖かく救い出してくれる幸福感
(Das unendliche tiefe warme erlösende Glück)。」
- 30) Kafka, Franz: Das Schloß, Kritische Ausgabe, S. Fischer, 1983, S. 23f.
- 31) Ebd. S. 25
- 32) a. a. O.
- 33) Ebd. S. 249.
- 34) Ebd. S. 248.
- 35) Ebd. S. 253f.
- 36) Ebd. S. 226.
- 37) Ebd. S. 228
- 38) Ebd. S. 229
- 39) Ebd. S. 230
- 40) Ebd. S. 235.
- 41) Robert, Marthe: 古きものと新しきもの, 城山良彦訳, 法政大学出版局, 1973,
p. 243
- 42) Emrich, Wilhelm: Franz Kafka, Athenation, 1975, S. 326.
- 43) Binder, Hartmut: Kafka Kommentar zu der Romanen, Winkler, 1982, S. 291.

Nachtrag

昨年 Textverarbeitungsprogramm の Tübingen のデータ処理システムの援助のもと
で, >Indices zur Deutschen Literatur< のシリーズ 26 巻~28 巻にわたって Franz Kafka
の長編 3 部作『失踪者』(Der Verschollene), 『審判』(Der Proceß) 並びに『城』(Das
Schloß) の >>Synoptische Konkordanz zu Franz Kafkas Romanen<<³ Kritische Aus-
gabe を底本とに Max Niemeyer Verlag, Tübingen より出版された。これは正に今後の

Kafka の作品研究に画期的役割を果たす『要約語句索引集』と呼んでよい。

思えば筆者が Hartmut Binder 著の『Kafka in neuer Sicht』(1976) に刺激されて、浅学ながら Kafka の『城』の Textkritik を思い立ち、また幸運にも 1982 年～1983 年にわたる文部省長期在外研究員として Hartmut Binder 教授の下で留学の機会を得て、更にその直前に画期的な Kafka 全集の Kritische Ausgabe の第 1 巻として『城』出版された。そこで主要登場人物を中心にした項目別のカードを手造りで試み、この筆者の手造りカードをもとに、留学以降も牛歩のごとくであるが、いつかの登場人物の覚書を継続してきた。そして 10 年後の 1993 年に電算機処理による待望の『要約語句索引集』が出版された次第である。もちろん筆者の本稿にとって最も便宜した基本文献となった。ただこの文献にも限界があり、例へば父親 Otto Brunswick の場合、Brunswick の人名が記されている文章は完全に網羅されて、収録されているが、er で受けた文章は枚挙されていなく、その限りではやはり要約索引にすぎない。当然原文にあたって、更に該当する文章を逐次追加した上で、それぞれ検討する必要はあった。

尚、引用文の () 内は原文に即した筆者の補注である。